

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成22年4月30日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 東南アジア研究所

職 名 教授

氏 名 杉 原 薫

事業区分	平成21年度・学術研究書刊行助成		
刊行書名	地球圏・生命圏・人間圏 - 持続的な生存基盤を求めて -		
著者(編著者)名	杉原薫(東南アジア研究所・教授) 川井秀一(生存圏研究所・所長) 河野泰之(東南アジア研究所・教授) 田辺明生(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授) (奥付のとおり記入)		
発行者名	一般社団法人 京都大学学術出版会 代表理事 加藤重樹		
発行年月日	平成22年3月31日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	直接出版費 (内訳は下記のとおり)	3,010,350円	
	収入見込額 (著者負担・売上見込)	1,510,350円	
	当財団からの助成額	1,500,000円	
	直接出版費の内訳		
	費目	金額 (円)	備考
	組版代	1,271,800	
	製版代	443,200	
	刷版代	199,200	
	印刷代	336,000	
用紙代	208,800		
製本代	408,000		
消費税	143,350		
合計	3,010,350		

成 果 の 概 要 / 杉 原 薫

杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生編『地球圏・生命圏・人間圏 - 持続的な生存基盤を求めて -』京都大学学術出版会、2010年3月。

本書は、京都大学グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(平成19~23年度)による、この3年間の研究活動の成果である。アジア・アフリカの熱帯地域には、現在世界人口の約半分が住んでおり、その比率は今後さらに上昇するものと考えられる。資源・エネルギー価格の激変や地球温暖化によってもっとも深刻な影響を受けるのも、発展途上国の多いこの地域である。かれらの作る地域社会にとって、どうしても欠かせない「生存基盤」とは何か。また、人類は地球環境の持続性を維持できるような生存基盤をどのように作っていけばよいのか。本書は、これまでの開発研究の中心的話題だった一人当たり所得、教育、健康などの「人間開発」の側面に加え、化石資源を供給し、地震や噴火によって人間圏をおびやかす「地球圏」、生命のつながりを人間と共有し、生物多様性や生態系の持続性への考慮をわれわれに求めている「生命圏」の二つの圏を視野に入れた「生存圏」の概念を提起することによって、こうした問題に新しい光を当てたものである。

本書の構成は次のようである。

序章 杉原薫 持続型生存基盤パラダイムとは何か

第1編 環境・技術・制度の長期ダイナミクス

第1編のねらい

第1章 杉原薫 グローバル・ヒストリーと複数発展径路

第2章 田中耕司 東アジアモンスーン地域の生存基盤としての持続的農業

第3章 小杉泰 乾燥オアシス地帯における生存基盤とイスラーム・システムの展開

第2編 地球圏・生命圏の中核としての熱帯

第2編のねらい

第4章 甲山治 地球圏の駆動力としての熱帯

第5章 神崎護・山田明德 生存基盤としての生物多様性

第6章 河野泰之・孫曉剛・星川圭介 水の利用から見た熱帯社会の多様性

第3編 森林からの発信 - バイオマス社会の再構築 -

第3編のねらい

第7章 川井秀一 熱帯林生命圏の創出

第8章 藤田素子 大規模プランテーションと生物多様性保全 - ランドスケープ管理の可能性

第9章 石川登 歴史のなかのバイオマス社会 - 熱帯流域社会の弾性と位相転移 -

第10章 渡辺隆司 産業構造の大転換 - バイオリファイナリーの衝撃 -

第4編 人間圏の再構築

第4編のねらい

第11章 清水展 グローバル化時代の地域ネットワークの再編 - 遠隔地環境主義の可能性 -

第12章 木村周平 われわれの〈つながり〉 - 都市震災を通じた人間圏の生存基盤への再編成 -

第13章 田辺明生 生存基盤の思想 - 連鎖的生命と行為主体性 -

終章 佐藤孝宏・和田泰三 生存基盤指数から見る世界

本書のねらいは、人類社会の価値観を地球環境の持続という課題に適合する方向に転換させるために必要だと考えられる、研究上の大きな分析枠組の設定にある。そのためにできるだけ幅広い文理融合を目指し、森林科学・木質科学、気象学・大気圏科学、物質循環論、エネルギー科学など「サステナビリティ学」に関連するハードサイエンスの領域と、伝統的な地域研究を支えてきた生態学、政治学・経済学、社会学・人類学、歴史学、医学の領域の知識を融合して、熱帯に属するアジア・アフリカの地域社会の研究の地平から、生存基盤の持続型発展の諸条件を探ろうとした。

序章では、既存の分析枠組の転換の方向として、資本主義社会の基礎をなす私的所有権制度の限界を超えようとする「地表から生存圏へ」、生産性上昇に社会の関心が集中していった西洋や東アジアの社会の価値観を相対化しようとする「生産から生存へ」、さらに地球圏、生命圏の中核であるはずの熱帯の環境を無視した現在の技術や制度の発展方向を正そうとする「温帯から熱帯へ」の三つのパラダイムの転換を提案している。続く4つの編では、歴史的な観点から諸地域における環境、技術、制度の相互作用の過程を描き、地球圏や生命圏の中核としての熱帯における地球圏、生命圏、人間圏の交錯を論じ、進んで地球上のバイオマスが集中する熱帯の森林地域における環境と経済、文化の衝突と融合を分析し、最後にこれらの分析をふまえた人間圏、および生存基盤の思想の再構築への展望を語っている。さらに、終章では、人間開発指数に代わる、生存基盤指数の作成の試みの中間報告がなされている。

本書は、多様な専門分野の研究者が集中的に議論を交わして執筆したものであり、すべてグローバルCOEの中心メンバーによる書き下ろし原稿である。出版に際しては、京都大学学術出版会の鈴木哲也氏、斎藤至氏に多大な御協力をいただいた。また本書の刊行に際しては、京都大学教育研究振興財団より平成21年度学術研究書刊行の助成をいただいた。心から御礼申し上げます。